モデルの獲得を通じて現代社会のあり方を考える高等学校公民科授業開発
ー　経済成長と貧困の関係をモデル化する授業　ー

下前　弘司

現代を学ぶ視点は，①変化の視点，②分析の視点，③比較・関連性の視点，④予測の視点，⑤価値判断の視点の５つに集約できるのではないかと考えている。しかし，⑤に踏み込むためには，公正にかつ客観的に学ぶということを満たすよう，社会科学の方法論を身につけさせ，事実判断の部分をしっかりと理解させるべきで，①～④をどう扱うかをまず考えなければならない。そこで，貧困発生のモデルを追究している開発経済学の研究成果を授業化し，途上国だけではなく日本にも適用させて今後を考えられるような知を獲得し，社会科学的かつ客観的に④をもち，⑤につなげていくような，「なぜ貧困は無くならなかったのか－経済成長と貧困の関係－」という授業を開発した。

１．はじめに

本稿では，高等学校公民科現代社会の授業を提案する。

まず，現代を学ぶとはどういうことなのかについて考えると，以下のようにまとめられるのではないだろうか。

①現代がどのようにできあがってきたのか，歴史的・通時的に学ぶ。（変化の視点）

②現代の社会においては何が存在し，どのように成り立っているのかを学ぶ。（分析の視点）

③現代に存在する制度やしくみ，事象がなぜその地域で受容されているのか（なぜそこにあるのか）を，共時的に学ぶ。（比較・関連性の視点）

④現状から考えて，今後どのようになっていくのかを考える。（予測の視点）

⑤現代の社会のありかたは望ましいものなのか，今後どのように変化させるべきなのかを考える。（価値判断の視点）

近年，現代社会への関心や学習意欲を引き出すなどの目的で，ディベートなどを通じて，⑤を中心とした授業がよく行われているが，このような価値判断を含む授業を行う前には，公正にかつ客観的に学ぶということを満たすよう，社会科学の方法論を身につけさせ，事実判断の部分をしっかりと理解させておかなければならない。よって，①～④をまず主眼とし，具体的な事実を用いて考えさせていき，その上で⑤につなげていくというような型を提示することが必要なのではないか。

２．小単元「南北問題」の内容構成の視点

本稿で提示する授業試案は，高等学校公民科現代社会における小単元「南北問題」に含まれるものである。

南北問題については，モノカルチャー経済，累積債務問題，南南問題，人口爆発，食糧問題，ODA や NGO と国際協力という内容を扱い，このような視点から，貧困の解消をどう考えるかについて扱うものが一般的であろう。しかし，貧困がなぜ発生するのかについて，ひとつの国ないしは地域における内部構造・環境から考え，貧困発生のメカニズムをモデル化するような視点が必要なのではないか。前節で示した①～③の視点は，個別事象を各個別的に扱うにとどまるものではなく，一般性・普遍性をもつ理論を導き出すことにつなげていくべきである。そうでなければ，社会科学的かつ客観的に④をもつことにつながりにくくなる。ひいては，公正に⑤の視点を持つことにもつながらなくなるだろう。

そこで，貧困発生のモデルを追究している開発経済学の研究成果を授業化して，途上国だけではなく，日本にも適用させて今後を考えられるような知を獲得し，社会科学的かつ客観的に④をもち，⑤につなげていくような授業を考えるに至った。

３．小単元「南北問題」の授業試案

以上のような見解のもと，「なぜ貧困は無くならなかったのか－経済成長と貧困の関係－」という授業を作成した。また，この授業は本校の教育研究会において実際に行った。

以下にこの授業試案を教授書の形式で提示する。

高　等　学　校　公　民　科　「　現　代　社　会　」　学　習　指　導　案

１．主題　　なぜ貧困は無くならなかったのか－経済成長と貧困の関係－

世界にはきわめて巨大な所得格差が存在しており，これを解消するために，途上国を経済援助し工業化を進めるなどして如何に経済成長を促すかが多く論じられている。しかし，経済成長すれば本当に貧困が解消するのか

どうかを考えておかなければ，当初の目的は達せられない。

様々な取り組みがなされているが，貧困が解消されないという現実を直視するために，本時においてはまずインドを主に取り上げ，ASEAN4 などとの比較を通じて，経済成長が進んでいても貧困がなぜ無くならないのかを考えるポイントを導き出す。そして，それをふまえて，開発経済学の研究成果を参考にしつつ，貧困が解消しないメカニズムについて考察する。さらに，以上をふまえた上で，今後どうすればいいかを考える。

2．評価規準

関心・意欲・態度	現実を直視し，世界に未だに残存する貧困の問題を自らと関係の深い問題であると考え，主体的に解決しようとする。
思考・判断	貧困が発生するメカニズムや要因を，経済学的な視点から考察し，経済学の理論や概念，用語を用いて追究的に思考・判断することができる。 貧困を如何に解消するかについて，経済学的な視点から考察し，具体的な問題解決方法を考えることができる。
技能・表現	貧困が発生するメカニズムや要因，および貧困の解消方法について，経済的な理論や概念，用語を用いて，論理的にまとめることができる。
知識・理解	貧困が発生するメカニズムや要因，および貧困の解消方法を説明するための知識を身につけている。

3．到達目標（獲得させたい知）

1．低所得者の所得水準を上げなければ，貧困や所得格差の解消にはつながりにくいことを確認する。
2．豊かさの象徴とも言われたタタ自動車をめぐる問題から，貧困を考える要点を引き出す。
3．工業化は貧困の解消につながるかどうかを，モデルを提示しつつ検証する。
4．モデルに基づく考察と，インドの現状とのつながりを確認する。
5．貧困がなくならない原因を考え，４つの生産要素をふまえてまとめる。
6．貧困を解消するために必要なことは何か，実際に行われてきた事例をふまえて考える。

4．授業展開過程　注）資料の欄にある数字は，プリントにある図の番号に対応している。また，「記事」は「日経ビジネス」の記事のことである。

	教師の発問	教授・学習過程	資料	生徒から引き出したい知識・学習内容・思考過程など
導入	・政府の経済対策は，何を目的としているのであったか。	T:発問する P:答える		・失業や貧困の解消，景気対策などを目的としている。
	○貧困や所得格差を解消するポイントは何だったか。	T:発問する P:答える		○所得移転などが起き，低所得者（貧困層）の所得が向上しなければならない。
	・BRICs とは何か。	T:発問する P:答える	1	・ブラジル，ロシア，インド，中国の４国で，めざましい経済成長を遂げている国のことである。インドの経済成長率は高水準だ。
	・所得税の授業を参考にすると，経済発展を支える，主な主体は何だと考えられるか。	T:発問する P:答える		・生産年齢人口である。
	・インドの生産年齢人口の変化から何が読み取れるか。	T:発問する P:答える		・生産年齢人口割合が増えているから，今後もさらに経済成長すると考えられる。
	・生産年齢人口が増えて経済成長が続けば，貧困の解消につながるだろうか。	T:発問する P:考える	2	・必ず解消するとは限らないのかもしれない。
	・そのほかに，インドの豊かさについて資料から読み取れることはないか。	T:発問する P:資料分析 P:答える		・IT 産業の発展が著しい。 ・産業構造の高度化が進んでいる。 ・中所得層以上の世帯が増加している。
	○「日経ビジネス」の記事で問題とされていることの要点は何か。その要点から推測できることは何か。	T:発問する P:資料読解 P:考える P:答える	3 4 7	・大衆が購入可能な車をつくろうとし，支持されていたタタ自動車が問題となっている。 ○政府は産業革命を起こしたいと考えているが，主要産業が農業であるインドの現実と相容れない状況がある。

			記事	・土地収用に農民が反対している。 ○インドの工業化実現のためには，農業支援が必要なのではないか。
展開 I	・工業化が進み，工場ができたとする。所得を増やそうとすると，どんな変化が起きると考えられるか。(Case.1)	T:発問する P:考える P:答える		・一人当たりの所得が等しくなるまで，農業部門から工業部門へと労働力がシフトする。
	・Case.1 のような変化は，何をあらわしていると考えられるか。	T:発問する P:答える		・全員の所得が増え，総生産額も増加することになるから，工業化によって経済成長が実現し，所得水準が向上したことになる。
	・Case.1 のように，労働力がシフトするだろうか。しないならば，それはなぜか。資料から何か考えられないか。	T:発問する P:資料分析 P:答える	5	・文字の読み書きができず，教育を受けていない人は，マニュアルを読んだり報告書を作成したりすることができないから，工業部門への移動は難しいだろう。
	・労働力シフトを阻害する要因は何か。	T:発問する P:答える		・識字率や教育水準の低さが，労働力シフトの阻害要因となる。
	・識字率は約６割だから，工業へシフトできる人を６割とするとどうなるか。(Case.2)	T:発問する P:考える P:答える		・労働力シフトが阻害されると，所得格差が発生する可能性があることがわかる。
	○生産要素とは何であったか。	T:発問する P:答える		○労働力・土地・資本・起業家(ｱﾝﾄﾚﾌﾟﾚﾅｰ，知的財産)である。
	○工業化が進むということは，どういうことだと言い換えられるか。	T:発問する P:答える		○生産要素が工業部門へとシフトすることである。
	・「日経ビジネス」の記事で，土地に関して何が起こっていると書かれていたか。	T:発問する P:答える		・農民から土地が奪われ，農民がデモをおこしていると書かれていた。
	・１／２の土地が農業部門から工業部門へとシフトしたとすると，どのような状況になると考えられるか。(Case.3)	T:発問する P:考える P:答える		・土地のシフトによって，さらに所得格差が生じてしまうと考えられる。
	○以上より，生産資源のシフト如何によって，どんなことが起こると考えられるか。	T:発問する P:答える		○農業従事者の所得向上につながらず，工業従事者との所得格差が拡大するおそれがあると考えられる。
展開 II	・インドの貧困の現状はどうであるか。	T:発問する P:答える	6 7	・農村部の貧困人口が都市部よりも多い。 ・貧困は縮小しているが，まだ３割が貧困状態にある。
	○工業化が進むと，貧困は解消するのだろうか。	T:発問する P:答える		○工業化をすすめても，識字率や教育水準を高めたりしなければ，所得格差は拡大し，貧困の解消にはつながりにくい。 ・農林水産業の成長率はあまり伸びていない。
	○前回の授業をふまえると，貧困がなくならなかった原因は何であったか。	T:発問する P:答える	1	・所得移転などが起きず，低所得者（貧困層）の所得が向上しないこと。
	○今回の授業より，貧困がなくならなかった原因は何だと考えられるか。	T:発問する P:答える		・生産要素のシフトの状況である。
	○生産要素それぞれについて考えると，貧困がなくならなかった原因は何だと推察できるか。	T:発問する P:答える	5 8	○識字率，教育水準の低さが原因となる。 ○農地の縮小が原因となる。 ○工業化に資本がまわされ，農業への資本投下が少ないことが原因であると考えられる。 ○農業部門で技術革新を担う企業家に対応する人が育っておらず，生産力の向上が進んでいないことが原因であると考えられる。
	○資料より，他にどのような原因があると考えられるか。	T:発問する P:資料分析 P:答える	8 9	○労働生産性と土地生産性が低いことが原因である。 ・農業就業者が多いのに，アメリカのように穀物を完全に自給できていないから，やはり生産性が低いことが原因ではな

				いか。
	○以上より，工業化と農業との間にはどのような関係があると考えられるか。	T:発問する P:答える		○工業を優先しすぎると，農業に悪影響が出るというトレード・オフ（機会費用）の関係があると考えられる。
終	○貧困を解消するためには，具体的にどうすればいいだろうか。	T:発問する P:答える		○識字率や教育水準を高め，工業化が進んでも，労働力シフトが円滑に進むようにする。 ○農業にも資本を投下し，技術革新をすすめ，労働生産性や土地生産性を高める。
	・青年海外協力隊や企業，NGO 団体などが途上国支援を行っているが，具体的にどのようなことを行っているか。その活動は貧困解消につながるか。	T:発問する P:答える		・学校をつくったり，農業指導をおこなったりしているから，教育水準を高め，生産性を高めることにつながり，貧困の解消につながる活動だと考えられる。
	・農業生産性向上をめざした緑の革命というものがあり，食糧自給率向上と貧困解消を目的としていたが，貧困を深刻にしてしまったという批判がある。それはなぜだろうか。	T:発問する P:考える	9	・緑の革命は農業生産性向上と貧困解消を目的とした活動であったのだ。 ・生産性が高まるのに，なぜ貧困が深刻になるのだろうか。
	・収穫がふえるよう，最先端の品種を栽培させたのだが，最先端の品種だからこそ，問題になったりすることがあるが，それは何だろうか。	T:発問する P:考える		・最先端の品種だから，お金がかかるということなのだろうか。
結	・最先端の品種には特許があり，収穫した種を無断で利用することができず，栽培をしようとするたびに，購入しなければならないのだが，このことからどういう問題が発生すると考えられるか。	T:発問する P:答える		・高価格の種を毎回購入するのだから，莫大な費用がかかるだろう。 ・場合によっては借金をしなければならない可能性がある。
	・最先端の品種を用いたら，かならず莫大な収穫が見込めるのだろうか。	T:発問する P:考える P:答える		・気候や天候如何では，収穫量に悪影響が出るかも知れない。 ・栽培方法などの説明書を理解することができなければ，うまく扱えないことも考えられる。
	○以上をまとめると，貧困解消に向けて，どのように考えることが重要なのだろうか。	T:発問する P:答える		○生産要素の分配の状況を考え，低所得者や貧困層の所得向上へ長期的につながるか否かを検証することが重要である。

5．資料の出典

・記事については，Mehul Srivastava with Ian Roeley，Moon Ihlwan「インドは「農民 VS 工場」」Nikkei　Business 2008 年 9 月 15 日号，p.142 を使用した。

・図はすべて，経済産業省編『通商白書 2007』にあるデータを用いて作成した。
但し，図 6 は（http://www.meti.go.jp/report/tsuhaku2007/2007honbun/index.html）からの引用である。

＜なぜ貧困はなくならなかったのか　～インドの事例から考える～＞（一部抜粋）

・貧困や所得格差を解消するポイントは何だったか。（前回の復習）

～労働力シフトと所得の変化モデルから考えよう～

Case.1　工業化が進み，工場ができました。所得を増やそうとすると，どのような変化が起きるだろうか？単純に考えると……

農業部門	工業部門		農業部門	工業部門
従事者：100 人	従事者：0 人	⇒	従事者：＿＿人	従事者：＿＿人
生産：100 万ルピー	生産：300 万ルピーの見込み		生産：100 万ルピー	生産：300 万ルピー
所得：1 万ルピー			所得：＿＿万ルピー	所得：＿＿万ルピー

ここで重要なポイントは，＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ということ。

このようになれば，100 人全ての所得が増え，総生産額も増加する。ということは，工業化によって経済成長が実現し，所得水準が上昇したことになる。

しかし，労働力は Case.1 のようにスムーズにシフトするとは限らない。労働力シフトを阻害する要因があるが，

それは＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿（図：　　）である。

この阻害要因を考慮に入れるとどうなるだろうか。

Case.2　阻害要因を考慮に入れると…

農業部門	工業部門		農業部門	工業部門
従事者：100 人	従事者：0 人	⇒	従事者：＿＿＿人	従事者：＿＿＿人
生産：100 万ルピー	生産：300 万ルピー		生産：100 万ルピー	生産：300 万ルピー
所得：1 万ルピー	の見込み		所得：＿＿＿万ルピー	所得：＿＿＿万ルピー

ここからわかることは，＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ということ。

まだ見落としはないだろうか。ここで，「生産要素」を思いだそう。

生産要素とは，＿＿＿＿＿＿，＿＿＿＿＿＿，＿＿＿＿＿＿，＿＿＿＿＿＿である。　つまり，工業化するということは，これら生産要素が工業部門へシフトするということを意味しているのだ。

この中で，土地の問題を考えてみよう。「日経ビジネス」の記事によると，土地に関して何が起こっているのであったか？→＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

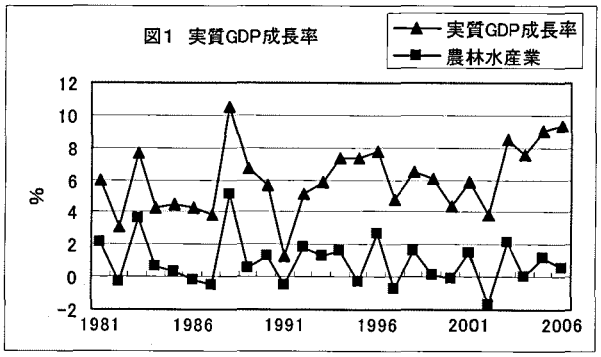
Case.3　土地シフトを考慮に入れると…（農地の半分が工業にシフトしたとしよう）

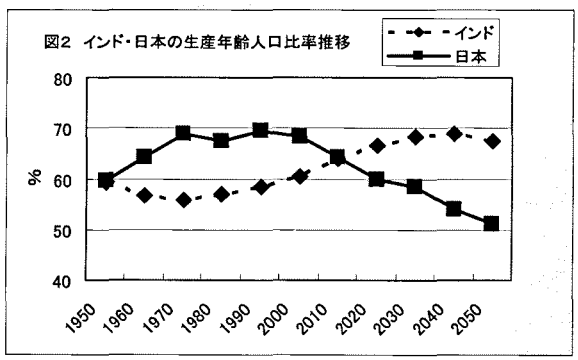
農業部門	工業部門	計算
従事者：＿＿＿＿人（Case.2 に同じ）	従事者：＿＿＿＿人（Case.2 に同じ）	
土地：1／2 単位	土地：1／2 単位	
生産：100 万ルピー	生産：300 万ルピー	
所得：＿＿＿＿万ルピー	所得：＿＿＿＿万ルピー（Case.2 に同じ）	

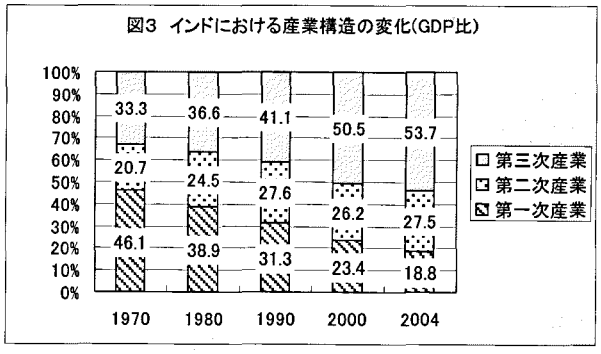
というわけで，生産資源のシフトのあり方によっては，＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿。

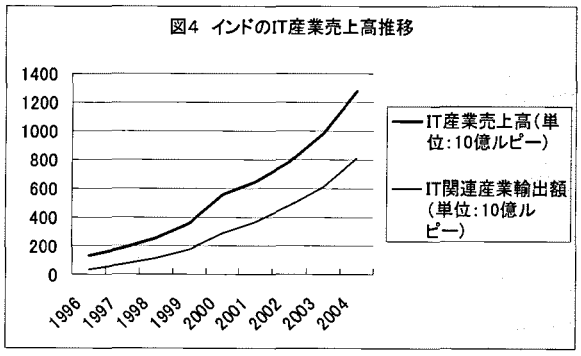
（以下，参考資料）

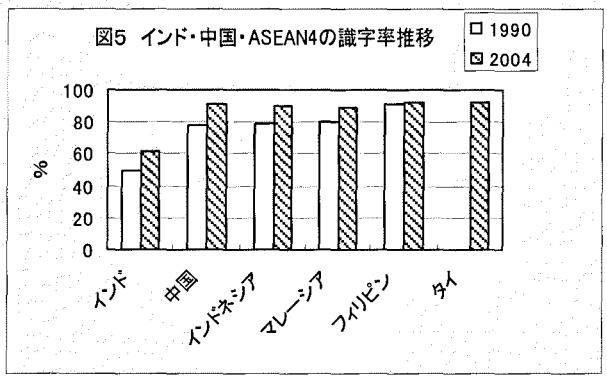
図のデータは６を除いて，経済産業省編『通商白書 2007』のものを用いた。図６は『通商白書 2007』より抜粋。

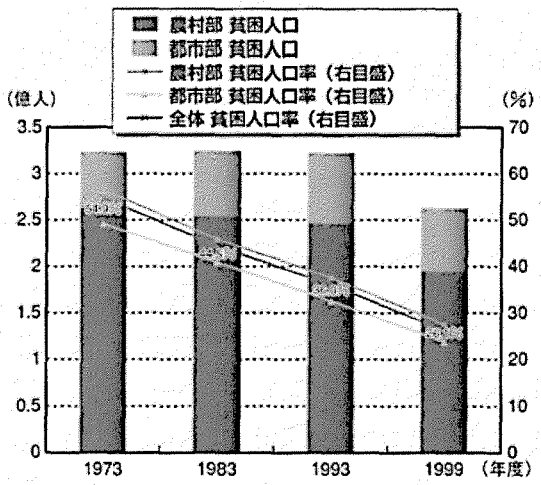




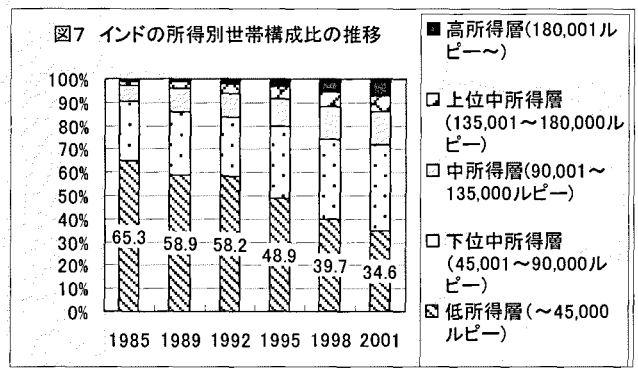


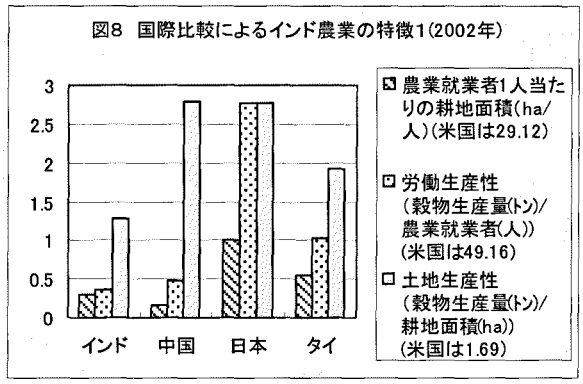


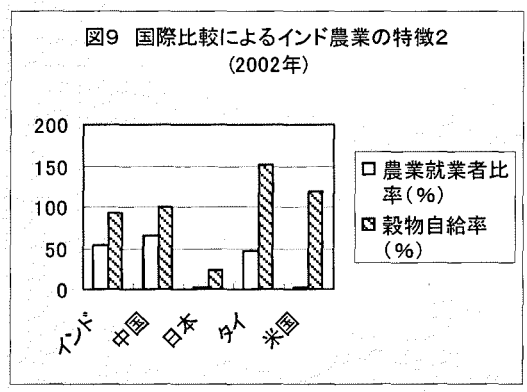




(備考)インドの貧困人口の定義は、1日1人当たりのカロリー摂取量(都市部:2,400kcal、農村部:2,100kcal)を満たす1人当たりの月額消費額のラインを貧困線と規定している。物価による変動を考慮しており、73年度は、都市部:56.76ルピー、農村部:49.63ルピー、99年度は、都市部:454.11ルピー、農村部:327.56ルピーとされている。
(資料)インド準備銀行Webサイトから作成。







4．参考・引用文献

・アマルティア・セン著,石塚雅彦訳『自由と経済開発』日本経済新聞出版社，2000 年。
・伊藤洋一『IT とカースト　インド・成長の秘密と苦悩』日本経済新聞出版社，2000 年。
・ムケシュ・エスワラン,アショク・コトワル著,永谷敬三訳『なぜ貧困はなくならないのか　開発経済学入門』日本評論社，2000 年。
・経済産業省『通商白書 2007』財務省印刷局，2007 年
・小島寛之『容疑者ケインズ』プレジデント社，2008 年。
・佐伯胖『「わかり方」の探求　思索と行動の原点』小学館，2004 年。
・椎野幸平『インド経済の基礎知識』JETRO,2006 年
・ジョセフ・E・スティグリッツ,カール・E・ウォルシュ著,藪下史郎他訳『スティグリッツ　入門経済学第 3 版』東洋経済，2005 年。
・全国社会科教育学会『社会認識教育学研究ハンドブック』明治図書，2001 年。
・全国社会科教育学会編『社会科教育のニュー・パースペクティブ — 変革と提案 —』明治図書，2003 年。
・全国社会科教育学会編『社会認識教育の構造改革 — ニュー・パースペクティブにもとづく授業開発 —』明治図書，2006 年。
・日本経済新聞社編『インド　目覚めた経済大国』日経ビジネス人文庫，2007 年。
・速水佑次郎『新版　開発経済学』創文社，1995 年。
・ビル・マッキベン著,大槻敦子訳『ディープエコノミー』EIJI PRESS，2008 年。
・Mehul Srivastava with Ian Roeley , Moon Ihlwan「インドは「農民 VS 工場」」Nikkei Business 2008 年 9 月 15 日号，p.142。